

「ECONO トリビア」 QWERTY 記事顛末記

安岡 孝一^{1,a)}

概要：「パソコンのキーボードのキーの配列が不自然だと思ったことはありませんか」から始まる読売新聞記事(2015年3月2日)に反論を試みた。記事のごく一部は訂正されたものの、反論の大部分は徒勞に終わり、「連続して打つ頻度の高い文字を遠ざける並び方に変えた」というガセネタが、再々流布される結果となった。このような局面において、人文情報学に何ができるのか、問題提起と考察を試みる。

キーワード：人文情報学，キー配列，タイプライター，所在目録



商業用タイプライター
「ショールズ&グリッペン
タイプライター」(1874
年) = 菊武学園提供

パソコンのキーボードのキーの配列が不自然だと思ったことはありませんか。左上端から右方向にアルファベットが「Q、W、E、R……」の順に並び、「QWERTY配列」と呼ばれています。でも、なぜABC順ではないのでしょうか。ルーツはタイプライターにあります。諸説ありますが、現在に伝わる商業用タイプライターの起源は、米国の発明家・シヨールズが製造し、1874年に発売された製品だとされています。

ECONO トリビア 不要な文字 打たない工夫

キーを押すと、先端部に活字が付いたハンマーが動いて紙に印字する仕組み。当初はABC順でしたが、連続して打ったり、早く打ったりすると近くのハンマー同士がからみ合い、不要な文字まで印字されてしまうという欠陥がありました。そこで、連続して打つ頻度の高い文字を遠ざける並び方に変えたとい、QWERTY配列が生まれました。

その後、米国で1930年代に、よりスムーズに打てるという「ドボラク配列」が誕生。日本でも富士通が1980年にかな文字入力に適した「親指シフトキーボード」をワープロに採用するなどしましたが、QWERTY配列が今も標準式配列となっています。

図1 2015年3月2日読売新聞(大阪版)朝刊「ECONO トリビア」

¹ 京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター

^{a)} yasuka@kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp

1. コトの発端

2015年3月2日の読売新聞大阪版(第22277号)朝刊 p.7に、図1の記事が掲載されているという連絡を、とある方々からいただいた。連絡して下さったのは、拙著『キーボード配列 QWERTY の謎』[1]の読者の方々に、かなり憤慨のご様子。確かにこの記事、ざっと読んただけでもガセネタのオンパレードで、人文情報学を標榜する筆者としても看過できない。まずは筆者のWWW日記[2]で、当該記事の問題点をざっと指摘した。

2. 読売新聞記者の釈明

指摘の旨を読売新聞に伝えたところ、読売新聞大阪本社経済部の船木七月と名乗る記者から、筆者のところに釈明の連絡があった。釈明は多岐に渡っていたが、要約すると

- a 写真のタイプライターが「1874年製」というのは、菊武学園に取材して確認した。ただし、あくまで電話取材であって、実機は見えていない。写真も菊武学園に送ってもらった。
- b タイプライター製造会社の「レミントン」は記憶にあったが、書くのを忘れてしまった。その結果「ショールズが製造し、1874年に発売」という誤った文章になった。
- c 「連続して打つ頻度の高い文字を遠ざける並び方に変えた」については、冒頭に「諸説ありますが」と断りを入れている。
- d 「親指シフトキーボード」は、日本のキーボードの一種として紹介した。QWERTYと対比したわけではなく、「親指シフトキーボード」の英文がQWERTYだったことも承知している。

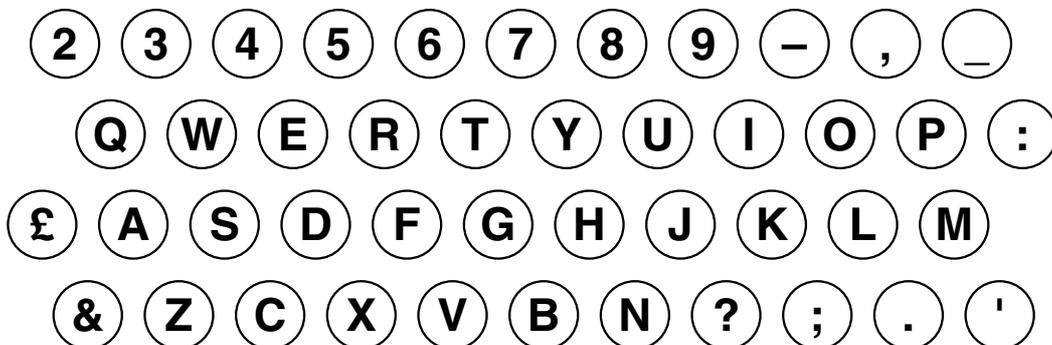
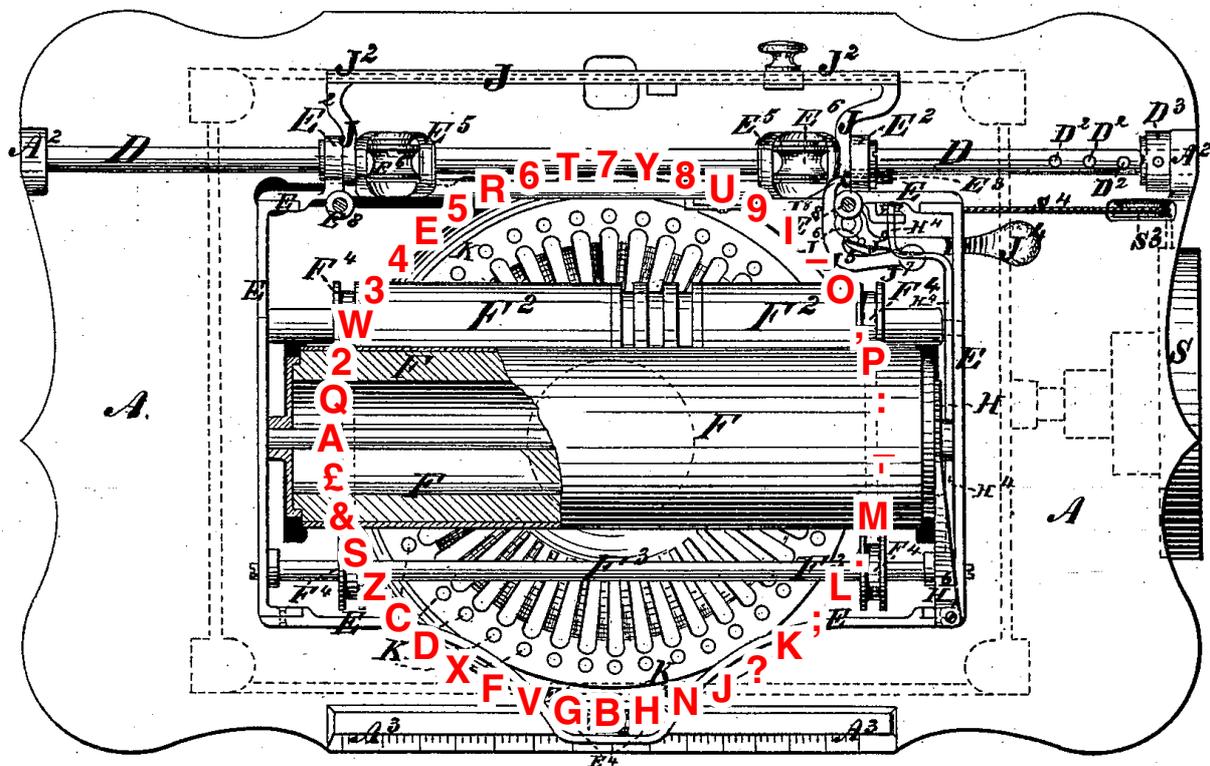


図2 菊武学園所蔵の Sholes & Glidden Type-Writer を上から見た際の活字棒(ハンマー)配置とキー配列



図3 菊武学園所蔵の Sholes & Glidden Type-Writer [3]
(写真は菊武学園提供)

とのことだった。筆者個人としては、**d**は許せるものの、**a**はあまりに杜撰な取材で許しがたい。実機を取材していないとすると、いくら筆者が「その写真のタイプライターのタイプバスケット、EのハンマーとRのハンマーが、5を挟んですぐそばにあったでしょ、私も以前チェックしたんですよ。EとRは連続して打つ頻度が高いのに、キーボード上も遠ざかっていないし、ハンマーも近くにあります。その写真を出す以上、少なくともEとRに関して、**c**は明らかに間違いです」(図2)とか論しても、この記者には全く理解できないのだ。トリビアが聞いてあきれれる。

3. 反論記事の検討

釈明の**a****b****c**を何とかすべく、図1の記事に対する反論記事を、筆者自身を書いてみることを考えた。以下は、反論記事の検討過程の概要である。

まずは**a**に関して、検討してみよう。菊武学園所蔵の Sholes & Glidden Type-Writer は、キーボード上にE(ポンド)がある。その意味では英国輸出仕様であり、代理店が E. and T. Fairbanks & Co. に移った1878年7月以降のモデルだと考えられる。図1の写真および図3で確認できるとおり、筐体の向かって右側にキャリッジリターン・レバーとラインフィード・ホイールがあつて、美しい装飾を施したいわゆる「デコレーション・モデル」(1878年以後発売)である。一方、MやCやXのキー位置は、1882年8月以前のもの(図5)である。筆者の記憶が確かなら、菊武学園のマシンにフットペダルはなく、その点でも1874年製ではない。これらの内容を勘案する限り、菊武学園の Sholes & Glidden Type-Writer は、1878年から1881年間の製造と「推測」しておくべきだろう。また、反論記事の説得力を考えた場合、1874年製の「本物」の写真は必要だから、たとえば初号機の写真(図4)を入れる方がいい。



図4 Sholes & Glidden Type-Writer 初号機 [4]

bに関しては、1874年製のタイプライターを、ショールズ(Christopher Latham Sholes)本人が製造したという話は無い。1878ないし1881年製であっても、E. Remington & Sons で間違い無い。この点に関して議論の余地は全くない。

cに関して、検討してみよう。「連続して打つ頻度の高い文字を遠ざける並び方に変えた」というネタは、少なくともEとRに関しては間違いだ。あるいは、Iのキーが8のそばに移ってきたのは1871年頃のこと(図5)だが、当時、連続して打つ頻度の高かった1871をむしろ近づけている。Iを1として使っていたからだ。他のキーや活字棒(ハンマー)に関しても、以前、詳細に検討[5]したとおりで、「連続して打つ頻度の高い文字を遠ざける並び方に変えた」は全くのガセネタと言っていいたいだろう。それぞれの文字ごとに、移動した時期も違うし、理由も異なっているのだ(付録参照)。ただ、それを短い新聞紙面で、はたして

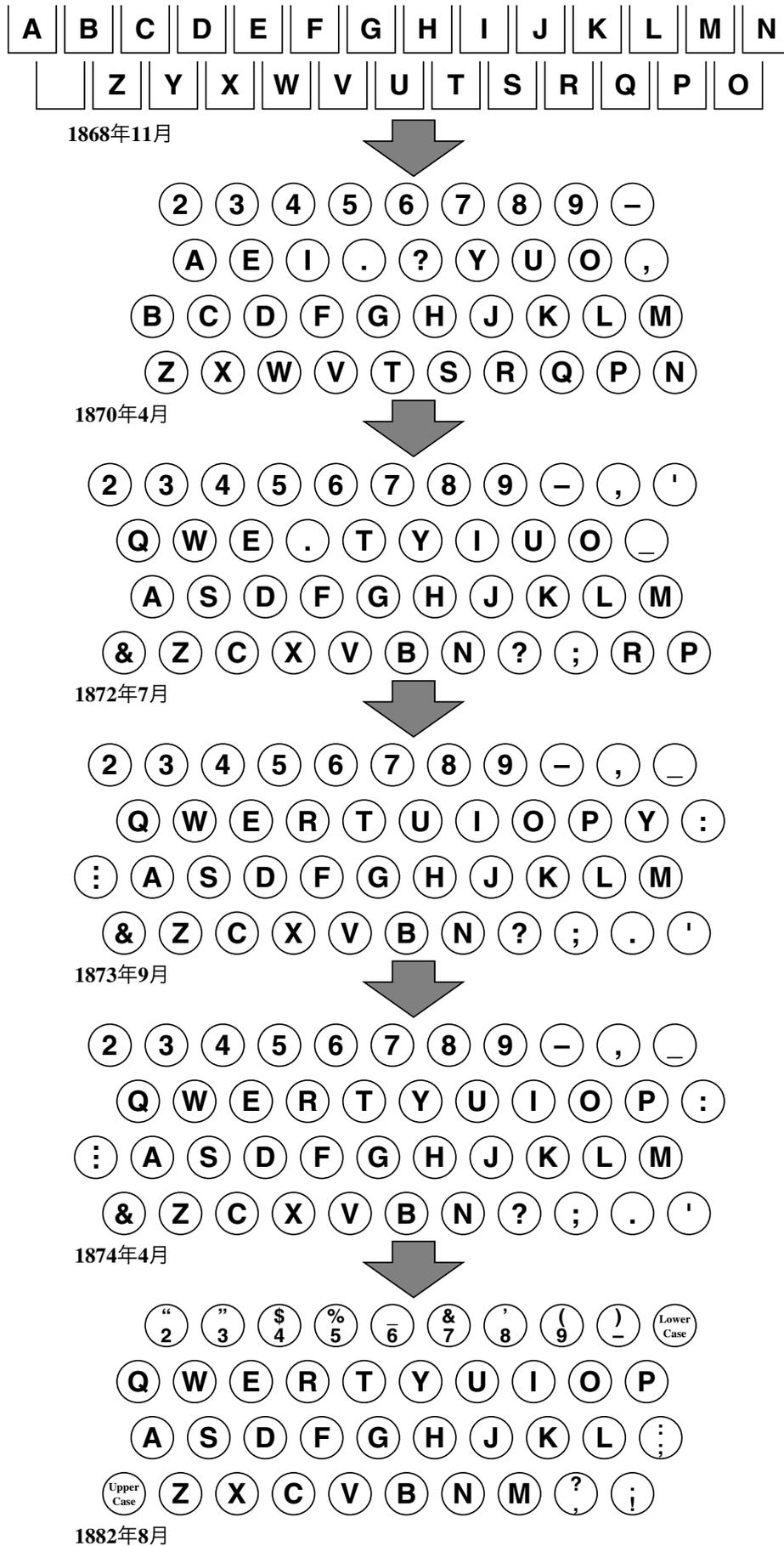


図 5 キー配列の変遷の概要 [1]



1874年製のタイプライター＝レミントンノー誌1913年4月号

3月2日の本欄に、1874年のタイプライターと題する写真が掲載されたが、私が見る限り、このタイプライターは1874年製ではない。キー配列だけを見ても、Aの左にE(ボ)があつて英国輸出仕様。Cの右にXが、Lの右にMがあるので、1878年から1881年の間にE・レミントン&サンズ社が製造したものと推測される。1874年製の「本物」の写真を左に載せておくので、ぜひ比較してほしい。

反論 1874年製ではない

現在のQWERTY配列が決まったのも、1874年ではなく1882年のことだ。ショールズの特許を忌避するため、レミントン社が1882年にタイプライターのキー配列を変更した。それが現在も使われているQWERTY配列だ。「連続して打つ頻度の高い文字を遠ざける並び方に変えた」というのは全くのデタラメで、単なる都市伝説に過ぎない。

この都市伝説を広めたのが、ワシントン大学のドボラクだ。1932年に開発した「ドボラク配列」を普及させるため、この都市伝説をばらまいてQWERTY配列を陥れた。「ドボラク配列」が普及せず都市伝説だけが広まったのは、歴史の皮肉と言えるだろう。

(京都大学 安岡孝二)



図6 筆者による反論記事のゲラ原稿

読者に伝えることができるかどうか。このガセネタは、そもそもドボラクの論文[6]その他の孫引きに過ぎないのだから、むしろドボラクを批判すべきではないか。

これらa b cに関する検討を、「ECONO トリビア」のフォーマットに入るよう、図6の形にまとめてみた。さらに、この反論記事をPDF化して、3月4日、船木記者に送付した。

4. 訂正記事の掲載

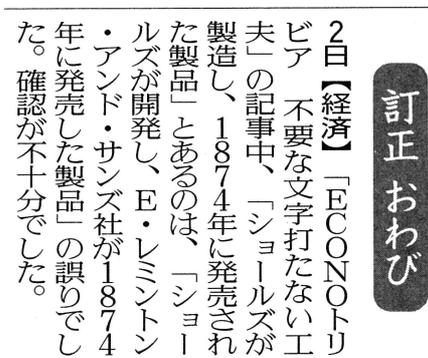
ただ、送付しながらも「さすがにボツかな」という弱気が、筆者自身にもあった。「ECONO トリビア」は毎週月曜日の連載なので、もう、かなり先まで予定が決まっていることだろう。次の連載日である3月9日に、筆者の反論記事を割り込ませるのは、そもそもそれが反論記事であるだけに、非常に難しい気がしたのだ。

結局、3月6日の読売新聞大阪版(第22281号)朝刊p.34に、bに関する訂正記事として、図7の文面が掲載された。

aやcに関する議論は完全に無視する形であり、指摘をおこなった筆者としては悲しい限りだった。

読売新聞の記者が最後まで、菊武学園の実機を直接取材

しようとしなかったのは、筆者個人としては返す返すも残念だ。ただこれは、記者個人の資質というより、元記事(図1)も訂正記事(図7)も無署名という事実や、議論中に漏れ聞いた出張費不足という現状から、読売新聞社全体の体質なのではないかと考えられる。そのような「体質」に対し、人文情報学は何ができるのか。



2日【経済】「ECONO トリビア」不要な文字打たない工夫の記事中、「ショールズが製造し、1874年に発売された製品」とあるのは、「ショールズが開発し、E・レミントン・アンド・サンズ社が1874年に発売した製品」の誤りでした。確認が不十分でした。

図7 2015年3月6日読売新聞(大阪版)朝刊「訂正 おわび」

5. 人文情報学は何ができるのか

今回、筆者の不満は、まず第一に、読売新聞が菊武学園の実機を直接取材しなかったことに起因している。しかし、筆者はなぜそれを不満に感じるのか。この点を少し掘り下げてみよう。

一般に言っても、ガセネタに反論するのは難作業である。たとえば、今回の④に反論するためには、菊武学園の実機を見ておかなければならないし、年代の特定に際しては、Hagley Museum & Library のレミントン・アーカイヴズ [7] での調査結果を動員する必要がある。実際、かなりの労力と根気、さらには知識を要する難作業である。それに対し、ガセネタをばらまく方は気楽なものだ。電話取材やインターネットで得た情報を、裏取りもせず書き散らせばいい。この不均衡さ加減に、筆者の不満のタネが隠れている気がする。ありていに言えば、筆者がかなり苦勞してガセネタに反論しているにもかかわらず、ガセネタをばらまく方は、全く何の苦勞もなしにガセネタをばらまき続けるのだ。確かにこれは、あまりにも不均衡である。

では、読売新聞が、筆者と同等かあるいはそれ以上の労力をかければ、筆者の溜飲は下がるのか。それも何か違う気がする。読売新聞に対して、そのような労力を強制するスベがないし、強制する道理もない。やれと言ったところで、やる可能性は低いし、まあ、やらないに決まっている。よしんば菊武学園(名古屋産業大学)を直接取材したとしても、デラウェア州の Hagley Museum & Library にまで取材に行くというのは、いくら何でも 14 字×36 行の記事には見合わない。労力の強制は、本質的に無理がある。

ならば、どうすればいいのか。人文情報学にできることはないのか。

目指すべきことの一つは、ガセネタをガセネタとしてわかってもらえる社会状況の確立だろう。新聞記事にガセネタが掲載されても、読者が全く騙されないのならば、別に何の不都合もない。ガセネタを流した新聞の方が、笑いものになるだけのことだ。そういう社会状況ならば、筆者としても、せいぜい WWW 日記で軽く指摘しておけばいい。しかし、ガセネタをガセネタとしてわかってもらえる社会状況には、どうすれば到達できるのか。100%は無理としても、せめてそのような社会状況を目指すには、どのような手立てが有り得るのか。

今回の④で言えば、菊武学園所蔵の Sholes & Glidden Type-Writer に関する調査結果を、筆者が積極的に公開していれば、結果は違っていたように思える。そうすれば、読売新聞がガセネタを流しても誰も騙されなかっただろうし、あるいは、そもそもガセネタ記事など書かなかったかもしれない。しかし現状では、菊武学園も筆者も、当該 Sholes & Glidden Type-Writer に関する情報を、ほとんど発信していない。これではガセネタも流れ放題だ。当該タ

イプライターに関する調査結果を、筆者はもっと早くに公開しておくべきだった。

さらにもう一步進めるなら、菊武学園所蔵の Sholes & Glidden Type-Writer のみならず、日本国内にある当時のタイプライターに関して、その目録を作り、各タイプライターに関する情報を発信すべきなのだ。つまるところ、タイプライターに関する所在目録と解題を作成し、それを WWW で発信するのが、人文情報学を標榜する筆者のなすべきこと、ということになる。正直なところ茨の道だ。しかし、タイプライターに関わる人文情報学研究者が、国内には(たぶん)筆者しかいない以上、筆者がやるしかないのだろう。

6. おわりに

一方で、「諸説ありますが」を免罪符として認めない態度も必要だろう。特に図 1 の記事の場合、「諸説ありますが」と書いていながら、その「諸説」を並記しておらず、ガセネタだけをばらまく結果となっている。このような記事に対しては、われわれ研究者は毅然とした態度を取るべきだ。その点で、今回の筆者の態度は、まだまだ弱腰だったと反省することしきりである。

参考文献

- [1] 安岡孝一、安岡素子：キーボード配列 QWERTY の謎、NTT 出版 (2008 年 3 月)。
- [2] 安岡孝一：読売新聞と QWERTY 配列 (2015 年 3 月 2 日)。
<<http://slashdot.jp/~yasuoka/journal/590418>>
- [3] タイプライタ博物館、菊武学園 (1999 年 1 月)。
- [4] “The Ancestor of Them All, Model 1 Remington—Serial No.1,” Remington Notes, Vol.3, No.2 (1913 年 4 月), pp.13-14.
- [5] Koichi Yasuoka and Motoko Yasuoka: “On the Prehistory of QWERTY,” ZINBUN, No.42 (2011 年 3 月), pp.161-174.
- [6] Willis L. Uhl and August Dvorak: “Cost of Teaching Typewriting Can Be Greatly Reduced,” The Nation’s Schools, Vol.XI, No.5 (1933 年 5 月), pp.39-42.
- [7] “Sperry Rand Corporation. Remington Rand Division Records, Subgroup III. Advertising and Sales Promotion Department” (1830~1975 年), Manuscripts and Archives Department, Hagley Museum and Library.
- [8] C. Latham Sholes: Improvement in Type-Writing Machines, U. S. Patent, No.207559 (1878 年 8 月 27 日)。

付 録

1868 年 11 月から 1882 年 8 月にかけて、キー配列上の各アルファベットがどのように移動したか、図 5 に即して述べる。ただし、各文字の移動理由は、必ずしも確定できているわけではないし、そもそもキー配列の変遷が一本道ではない(枝分かれが有り得る)点に注意されたい。また、各文字の移動の時間的前後関係も、必ずしも確定できていないが、図 8 に筆者の推定を示しておくので参考にされたい。

Aの移動 もともと左端にあったAは、1870年に母音の一つとして上段に取りだされたものの、1871年頃に中段の左端に戻っている。アルファベットの最初の文字であるがゆえに、左端に置くべきだとされた、と推測される。

Bの移動 Bは1871年頃に、Aに追い出されて、Tの跡地へと移っている。Vの右横に来たのは、偶然かもしれない、あるいは何か意図があるのかも知れないが、筆者には確定できていない。

Cの移動 Cは1871年頃に、Sに追い出されて下段へと移っている。さらに1882年には、ショールズの特許[8]を忌避するため、Xと入れ換えられているが、この結果、CとDとEは、ほぼ一直線に並ぶ形となっている。

Dは移動していない

Eの移動 Eは、1870年に母音の一つとして上段に取りだされた。その後は移動していない。

Fは移動していない

Gは移動していない

Hは移動していない

Iの移動 Iは、1870年に母音の一つとして上段に取りだされた。1871年頃に、8のそばへと移動しているが、これは当時Iを1としても使っていたことから、連続して打つ頻度の高かった1871を近づける意図があったと考えられる。1874年にはYの移動により、Iと8は少し離れてしまうが、1882年には数字全体が動くことで、Iと8の関係が復活している。

Jは移動していない

Kは移動していない

Lは移動していない

Mの移動 ショールズの特許[8]を忌避するため、1882年、Nの右横に移動した。

Nの移動 もともと右端にあったNは、1870年に下段の右端に行くものの、1871年頃に下段の真ん中に移動している。これは、Nが子音の中で2番目に使用頻度の高い文字だったから、だと考えられる。

Oの移動 Oは、1870年に母音の一つとして上段に取りだされた。さらに、1873年にIのそばに移動して来るが、これは当時、Iを1、Oを0として使っており、数字としても使うIとOを並べておく意図があったと考えられる。1874年にはYの移動により、Oは右に一文字ずれている。

Pの移動 Pは、1871年頃、Nの移動にともなって、下段の右端に移動している。その後1873年頃、アポストロフィとの交換によって最上段に追い出されそうになるが、さすがに最上段にアルファベットを置くのはバランスが悪く、アンダーラインを追い出す形でOの右横に取まった。さらにOとUとYの移動により左に一文字ずれるものの、1874年のYの移動で右に一文

字ずれて、現在の位置に取まった。

Qの移動 Qは、1871年頃、上段左端に新設されたキーに移動している。Nの移動との前後関係が不明で、Qの移動の理由も筆者には確定できていない。

Rの移動 Rは、1871年頃、NとQの移動にともなって、右に二文字ずれている。その後1873年頃、ピリオドとの交換で上段に移動しているが、これはむしろ、ピリオドなどの約物を右下に集める意図があったと考えられる。

Sの移動 Sは、1871年頃、ZとEの間に移動している。当時のアメリカン・モールズ符号では、「Z」は「...」で表されており、「SE」と区別がつきにくかったことから、次の文字が送られてきた段階で「Z」もしくは「SE」を速く打つために、SをZとEの間に移動したと考えられる[5]。

Tの移動 Tは、1871年頃、上段の真ん中に移動している。これは、Tが子音の中で最も使用頻度の高い文字だったから、だと考えられる。

Uの移動 Uは、1870年に母音の一つとして上段に取り出された。1873年にはOに追い出されて、Iの左横に移動するが、1874年にはYの移動により、Uは右に一文字ずれている。

Vは移動していない

Wの移動 Wは、1871年頃にXに追い出されて、Aの跡地に移動している。Wが半母音であることが移動の理由かもしれないが、筆者には確定できていない。

Xの移動 Xは、1871年頃にCに追い出されて、右に一文字ずれている。さらに1882年には、ショールズの特許[8]を忌避するため、Cと入れ換えられているが、この結果として元の場所に戻っている。

Yの移動 Yは、1870年に母音の一つとして上段に取り出された。1871年頃、Iに追い出されて、左に一文字ずれている。1873年にはUに追い出されて、Pの右横に移動するが、これに反対したショールズによって、1874年には元の位置に戻されている。

Zは移動していない ただし、ZとAを入れ換えたキー配列が(あるいは枝分かれの途中に)存在しており、Zが左下の端から動かなかったかどうかは、必ずしも判然としない。

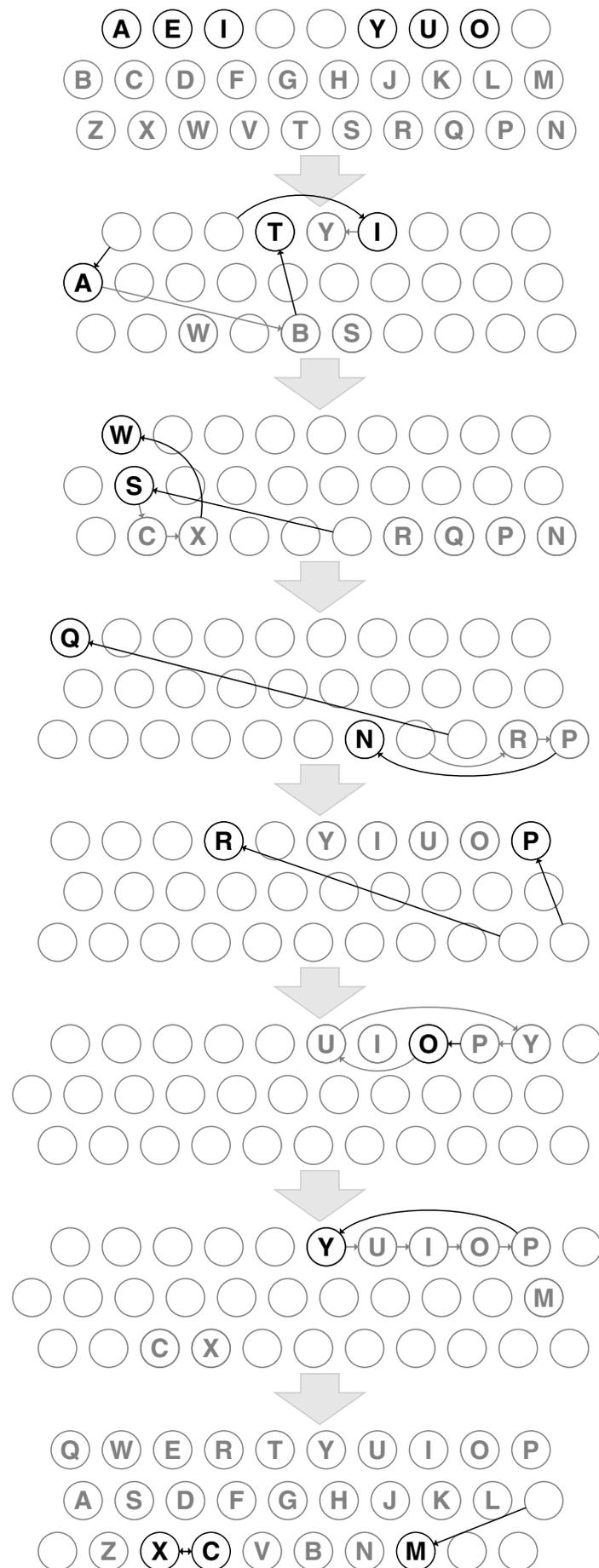


図 8 QWERTY 配列に至るまでの各文字移動の時間的前後関係